2018. 10.6 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

生誕100年 指揮者／作曲家 “巨匠バーンスタインの芸術” 第3回

プログラム

今年生誕100年に当たる20世紀を代表する大指揮者で作曲家、バーンスタインの特集も第3回で最終回です。自作の交響曲第2番は、イギリス生まれの作家 W.H.オーデンが発表した長編詩「不安の時代」に触発されて作曲、1949年に完成された作品で、第二次世界大戦中のニューヨークが舞台。マリン、クウァント、アンブル、ロゼッタという男3人と少女がバーで酒を飲みながら、自分たちの生き様や人類の境遇について考え、語っていく、というもので、ピアノ独奏を持った協奏曲風の作品となっていますが、ジャズ的な要素を取り入れるなど多彩な音色に魅了される名曲です。シベリウスの交響曲第5番は1915年、自身の50歳を祝う祝賀演奏会のために作曲された作品で、北欧の自然をのびやかに謡い、祝典的な雰囲気と高揚感を持った傑作ですが、バーンスタインは1960年代から1970年代初めにかけてニューヨーク・フィルと交響曲全集を完成、晩年にはウィーン・フィルと1番, 第2番, 第5番, 第7番を再録音するなど、古くから重要なレパートリーとしてきました。今回お聴き頂くのは、ロンドン響との1975年の名演奏ライヴです。シューベルトの交響曲第8番は1828年最晩年に書かれた最後の交響曲で、“グレート”は同じ調性の「第6番」と区別するための俗称ですが、溢れ出る美しい旋律、全曲にみなぎる躍動感、堂々たるスケール感など、まさに“偉大”なる交響曲です。バーンスタインの晩年の演奏は気力の充実したスケールの大きな名演です。晩年までマーラーとの関わりを強く持っていたバーンスタインにとつて特別な思いを持って取り組んでいたのは「第9番」かも知れません。バーンスタインの「第9番」といえば、1979年ベルリン・フィルとの一期一会の奇跡的な名演奏を思い出しますが、1985年イスラエル・フィルとの来日公演での演奏も、今日では語り草になっている程の名演奏だったと言われています。今回お聴きいただくのは来日直前に本拠地で行われた演奏会のライヴ録音です。「第9番」は死を予感し始めた1910年に完成された最後の交響曲。死への憧れと現世でのもがきは強奏和音と弱奏和音の激しい変化の中で、マーラーの人生観が凝縮されたような終楽章で終わります。その終楽章をバーンスタイン渾身の名演奏でお聴きください。

＊＊＊＊＊＊＊

レナード・バーンスタイン（1918～1990）：
交響曲第2番“不安の時代“～抜粋

クリスティアン・ツィメルマン(P)
レナード・バーンスタイン指揮ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団
（1988.11.14　カーネギーホールでのLive）

ジャン・シベリウス（1865～1957）：
交響曲第5番変ホ長調op.82 ～第1楽章、第2楽章から、第3楽章

レナード・バーンスタイン指揮ロンドン交響楽団
（1975.8.31　ザルツブルク祝祭大劇場でのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

フランツ・シューベルト（1797～1828）：
交響曲第8番ハ長調D.944“ザ・グレート“～第2楽章から、第4楽章

レナード・バーンスタイン指揮アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団
（1987.10.24　ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

グスタフ・マーラー（1860～1911）：
交響曲第9番ニ長調 ～第4楽章

レナード・バーンスタイン指揮イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団
（1985.8.25　テルアビブ、マン・オーデイトリアムでのLive）

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/